MSXマガジン5月号別冊付録

MSX HARD NEWS

ソニー●HBD-20W
●HBI-1200
パナソニック●FS-FD1
●FS-PW1
●FS-CM820
関西電機●KS-24M

ディスクを買うなら、今が旬です

ソニー・HBD-20W

MSX2マシンは安くなったのに、ディスクは依然高いまま。本体の2倍以上もするんじゃ、欲しくてもそう簡単に買うことはできないよ。な～んていってた人に朗報。ソニーとパナソニックから、44,800円の2DDディスクドライブが発売された。これさえあれば鬼に金棒、MSXの用途がぐ～んと広がるね。

ディスクは速いぞ！

同じ外部記憶装置としてのデータレコーダとディスクを比べた場合、その最大の違いはデータのロード・セーブに要する時間にある。たとえばテープで10分近くかかったものも、ディスクならアッという間、わずか数秒で完了してしまうのだ。また、60分テープにプログラムを何十本も詰め込んだなんて場合は、目指すプログラムの頭出しをするだけで一苦労。その上、ようやくロードできたなんて思ったら、ロードエラーが起きて始めからやり直し、なんてことにもなりかねない。同じデータレコーダ

HBD-20Wの主なスペック

●使用ディスク／3.5インチ●記憶容量／片面500KB・両面1MB(アンフォーマット時)、片面360KB・両面720KB(フォーマット時)●サイズ／幅160×高さ60×奥行き268ミリ●重量／3.5キロ●付属品／MSX-DOSシステムディスク、スペーサー、取り扱い説明書、他

でセーブしたものならともかく、別のものでセーブしたテープの場合、このエラーが起きる確立は格段に大きくなるのだ。

ところがこうした苦労も、ディスクなら一切不要。記録されているファイルの一覧を取ることも簡単にできるし、ランダムアクセスが可能なので、ファイル名を指定すれば、一瞬の内にプログラムをロードすることができる。また、こうしてロードしたプログラムにさらに手を加え、新たにセーブし直す場合も話は簡単。ファイル名を指定してセーブすれば、ディスクが自動的に空いているエリアを探し書き込んでくれるのだ。データレコーダの場合だと、新しいテープを用意したり、早送りして空きエリアを探したりしたわけだけど、ディスクならすべて任せっきりでＯＫ。不用になったプログラムはデリートして、新しいものと書き換えたりと、限られたエリアを無駄なく使えるわけだ。

また、ロード・セーブ時のエラー発生率も、テープに比べるとはるかに小さい。プログラムやデータを記録したディスケットに、故意に磁石を近づけたり、磁気面を指で触れたりすれば その内容は破壊されるけど、通常の使用でエラーを起こすことは、まずないといっていいだろう。特にＭＳＸで使われている3.5インチディスクの場合、ディスケット自体はプラスチックのケースで覆われ、ディスクのヘッドが接触する部分も通常はシャッターが閉じたかたちで、しっかりと磁気面が保護される構造になっている。これは他の多くのパソコンで使われている、５インチや８インチのものと比べても、非常に信頼性が高いものなのだ。

FS-FD１の主なスペック

●使用ディスク／3.5インチ●記憶容量/片面500ＫＢ・両面１ＭＢ(アンフォーマット時)、片面360ＫＢ・両面720ＫＢ(フォーマット時)●サイズ／幅160×高さ60×奥行き268ミリ●重量/3.5キロ●付属品/ＭＳＸ-ＤＯＳ+Ａ１ワープロ用ＪＩＳ第２水準漢字フォント・ディスク

パナソニック・FS-FD１

IF一体型で低価格化を実現

さて今回ソニーから発売された「HBD-20W」と、パナソニックの「FS-FDI」は、ともに価格が44,800円。もちろんこれは、インターフェイスも含めた価格だ。従来は約7万円（本体が5万円、インターフェイスが2万円）もしていたものが、どうしてここまでの低価格化を実現できたのか。そのひとつの理由が、徹底した合理化にある。

これまでの外付けのディスクの使用状況を調べた結果、1ドライブシステムとして使っている人がほとんどだったという。メーカーとしてはドライブを拡張することを考えて、わざわざ本体とインターフェイスを別売し、さらに本体後部には拡張ドライブのためのコネクタや、電源コンセントまで用意していたところ、それを活用している人はほとんどいないという結果がでたわけだ。

そこで今回の製品は、ドライブ本体とインターフェイス・カートリッジとを一体化し、はじめから1ドライブシステムとしての使用を意識したものになっている。そのためドライブ本体からの拡張は不可能で、どうしても2ドライブ必要な場合は、ディスクを2組用意し、それぞれ別のスロットに接続するという方法を取ることになる。インターフェイスを2つ使うことになるのだけど、よくよく考えてみると、価格的には従来のドライブ本体を買い足すより5000円程安くなるので、さほど問題はないだろう。もちろんこの場合、割り当てられるドライブ名は、それぞれAとCになる。

また、合理化のひとつとして、従来は本体後部に用意されていた電源コンセントも、この製品からは無くなっている。これよりも電源部も小さなもので済み、コストダウンが可能になったはずだ。

さてこうした合理化とは別に、価格を下げる要因となったものとして、ディスク内蔵型MSX2の普及がある。昨年末からの傾向として、基本機能に徹し価格を下げた普及型のMSX2（ソニーのHB-F1やパナソニックのFS-A1、そしてサンヨーのWAVY23など）と、これとは逆に機能を満載して（もちろんディスクドライブも含まれるわけだけど）MSX2の極限に挑んだような高級機の2極分化が起きている。この高級機のほとんどが2ドライブをはじめから内蔵しており、そのためドライブ単体の価格も、ぐ～んと引き下げられることになったのだろう。

両面倍密720KBの大容量

MSXおよびMSX2用に発売されているディスクドライブの記憶方式は、1DDと2DDの2種類。前者はディスケットの片面だけにデータやプログラムを書き込むもので、初期のディスクドライブはこの方式を取っていた。これに対し後者は両面に書き込むもの。2DDフォーマットで書き込まれたディスケットは、1DD方式のドライブでは読むことはできないけど、1DDフォーマットで書き込まれたディスケットを、2DD方式のドライブで読むことは可能。つまり、2DDのドライブは1DDのアッパーバージョンといえる。

「HBD-20W」と「FS-FD1」はともに2DD方式。つまり両面倍密倍トラックの記憶方式で、フォーマット時の記憶容量が720キロバイトのもの。これは現在のMSX2の標準的なドライブだ。

この2つのドライブには、それぞれMSX-DOSのシステムディスクが付属してくる。これはディスクの用途をより広げるもので、メインRAM64キロバイトのシステムで動作するものだ。またパナソニックの「FS-FD1」付属のディスクには、後のページで紹介するA1ワープロ用の、JIS第2水準漢字フォントも含まれている。

ソニーの「HBD-20W」は3月21日発売、パナソニックの「FS-FDI」は4月10日発売で、ともに価格は44,800円

COLUMN

なぜ、今フロッピーディスクが使われるのか

フロッピーディスクはどうして必要なのか、という質問をときどき受けます。ディスクは大容量外部記憶装置の一種です。大容量というのに基準はなく、MSXなどパソコン本体のメインメモリ容量より大きい、といった程度の意味があります。

MSXの周辺を見渡してみると、これらの装置としてカセットテープレコーダ、クイック・ディスク、ROMカートリッジなどがあります。また、ビデオディスクやCDなども、読み出し専用ですがプログラムを記憶しているものもあります。

これらの中で、手頃なのがカセットテープレコーダです。電気店やカメラ店などで手に入る、一般のコンパクト・カセットテープが記録のためのメディアとして利用でき、しかもレコーダ自体がとても安価であるというメリットがあります。

このように考えると、フロッピーディスクはドライブもディスクもカセットレコーダに比べて高価であり、そのメリットは何か、という疑問が出てくるのも当然です。このページで紹介したソニーのHBD-20Wやパナソニックのサンヨー FS-FD1にしても、他のディスクユーザーなら信じられないくらいの価格ですが、手元にあったカセットレコーダを流用している人などからみれば、まだまだ高価というイメージはぬぐえないでしょう。

フロッピーディスクのメリットには、本文にもあるように、書き込み/読み出し時の人手による機械的操作が不要、書き込み/読み出しが高速、エラーが少なく信頼性が高い、記録データの任意の位置から読み出し/書き込みができるランダムファイルが使える、DOS（ドスと恐ろしい発音をする）が利用可能、などがあります。

テープのリードエラーには、大抵の人が一度は泣かされた記憶があるでしょう。レコーダによって回転速度や信号の位相、またヘッドアジマスなどが異なっている場合が多く、エラーになりやすいのです。多くの場合、音量調整や位相の切り換えが必要になります。カセットテープレコーダは、本来は音楽や会話の録音用なのです。また、音楽なら仮に0.5秒のドロップアウトがあっても人によっては気になりませんが、MSXで使っている場合は50〜100文字の欠落になります。プログラムやデータは、その瞬間にリードエラーになってしまいます。

また、プログラムをロードしたりセーブする場合に、テープの場合は人間がいちいち頭出しをしてやらなければなりません。複数のプログラムを1本のテープに入れる場合は大変やっかいです。しかし、ディスクならプログラム名(ファイル名)を入れるだけで簡単にすんでしまいます。

とにかく、フロッピーディスクは高速で簡単で、しかも信頼性が高い、と考えればよいでしょう。でなければ、これほどパソコン用の周辺機器として普及するわけがありません。さらに、MSXで採用されている3.5インチディスクは、小さいながら容量が大きく、しかもジャケットが丈夫という特長も持ち合わせています。

最後にMSX-DOSに触れておきましょう。DOSは、ディスクを制御するための専用ソフトウェアです。DOSを使うと、30Kバイトなどという大きなマシン語プログラムでも、実行可能になります。本来はこちらがメインですが、説明すると本になってしまいますので、「実践研究ディスクシステム」などを参考にしてください。（Z）

文書の作成からプリントまでこれ1台

ワープロのオマケにMSXが付いたような、ワープロパソコンが評判になっているけど、どんなMSXでもこれさえあればワーコンになる、ワープロ・プリンタが発売された。それがパナソニックの「FS－PW1」と、関西電機の「KS－24M」だ。専用ワープロ顔負けの機能を持つ、2つのマシンを紹介する。

FS-4600Fと同機能

パナソニックから発売されたワープロ・プリンタ「FS-PW1」のご先祖さまは、先に同社から発売されている「FS-4600F」。これは通称「ワーコン」として親しまれている、一連のワープロ・パソコンの最新機種で、連文節一括変換方式採用の、本格的なワープロソフトを内蔵したものだ。これ1台で文書の作成や印字も可能、その上ディスク内蔵のMSX 2マシンとしても機能するとあって、大変な評判を呼んだことはいうまでもない。

そんなベストセラーのマシンから、美味しそう

FS-PW1の主なスペック
●変換方式／連文節一括変換（32字以内）●画面表示／30字×4行（MSXの場合は15字×4行）●印字方式／熱転写方式・サーマル方式●文字構成／24×24ドット●印字速度／約20字／秒（漢字）●8キロバイトのS－RAM内蔵●毛筆書体カートリッジ（別売）により毛筆印字も可能

な部分だけを取り出して、製品化したのが「FS-PWI」。MSXのカートリッジ・スロットに、ワープロソフトを内蔵したインターフェイスを接続し、そこから専用プリンタを拡張する。これでどんなMSXでも、一瞬の内に「ワーコン」に変身してしまうのだ。もちろん漢字ROMも内蔵。同じパナソニックから発売されている「FS-A1」と組み合わせれば、非常に安価なワーコンができ上がるというわけだ。

連文節一括変換で素早い入力

「FS-PWI」の変換方式は、前にも書いたように連文節一括変換。最大32文字までの文章を、一気に変換してしまうという、専用ワープロ顔負けの機能だ。これはMSX標準日本語処理ソフト(MSX-JE)に準拠しているので、今後開発されるアプリケーションソフトや、次に紹介するMSX-JE対応のモデム・カートリッジなどと、組み合わせて使用することが可能になる。

画面表示は、一連のワーコンと同じく30字×4行。画面上部にはレイアウトや、カーソル位置、和・英文選択、字体選択、打ち出し用紙のサイズなどが、常時表示されている。使用できる文字は、全角の他、半角、倍角~20×20倍角など。センタリング、右寄せ、インデント、挿入、空白挿入、削除、一字削除、複写、移動といった通常の編集機能の他、検索、置換、定型句登録、外字登録、下線、上下添字、タブ、デシマルタブ、書式設定、文頭・文末移動、頁移動、罫線作成(4種類)など、ワープロとしておよそ考えられるかぎりの機能をサポートしている。また、印刷機能にしても、全頁印刷、単頁印刷、横/縦印字などの他、禁則処理指定や、任意頁付、印字一時停止、スムージングなど、これまたさまざまな機能が用意されている。

作成文書のセーブには、3.5インチのフロッピーディスクやデータレコーダをサポート。前に紹介した「FS-FD1」などと組み合わせれば、本格的なワープロシステムができ上がる。1枚のフロッピーに記録できる文書量は、A4判で約250ページ。ちょっとした論文を書くのにも使えそうだね。

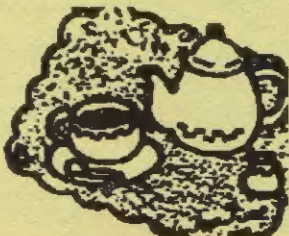
「FS-PWI」のプリンタは、熱転写/サーマル両方式のもの。使用できる用紙はハガキ~B4(横)、そして原稿用紙やロール紙まで。24×24ドット構成で、1秒間に約20字の漢字を印字する。ワープロソフトの入ったカートリッジとは、フラットケーブルで結ばれるため、通常のプリンタ・インターフェイスにあたるコネクタはない。けれども、BASICのリストを出力したりといった使い方も可能だ。

さて、ワープロとしての機能だけでなく、「FS-PWI」にはもうひとつのアプリケーションソフトが内蔵されている。それが「住所録・名刺帳」ソフト。1度に約200件もの名簿が管理でき、ハガキへの宛名自動レイアウト印字も可能という、すぐれもののソフトだ。

プリントサンプル

東京暮らしを始めたゾ

前略、苦難の浪人生活も、はや昔話となり、今や私も大学生。憧れの東京で、華麗なる一人暮らしを始めました。上京直後は、とまどいもありましたが、今はすっかりシティーボーイしております。東京へ来られる節は、ぜひ、お立ち寄りください。

東京都中野区新井1-10-3

MSX-Writeとプリンタが合体

アスキーから発売されている「MSX-Write」と、スター精密のＭＳＸ用プリンタ「ＴＲ-24m」を合体させてできたのが、関西電機から発売されたMSX対応ワープロセットプリンタ「KS-24M」だ。「FS-PW1」と同じように、こちらもMSX-JE準拠。２文節最長一致法による連文節変換採用と、専用ワープロに劣らぬ機能を持っている。

「MSX-Write」に内蔵された辞書ROMは約４万語(384キロバイト)。またＪＩＳ第一水準の漢字ROMも装備している。補助記憶装置としては、フロッピーディスクやデータレコーダをサポート。この他にＭＳＸ２や、ＲＡＭ容量64キロバイトのＭＳＸの場合は、裏ＲＡＭをＲＡＭディスクとしても使用できる。ディスク上に作成された文書ファイルは、MSX-DOSのファイルと互換性があるため、他のアプリケーションや16ビット用のMS-DOSで利用することも可能だ。

KS-24Mの主なスペック

●変換方式／連文節変換●画面表示／30字×6行（MSXの場合は15字×6行）●印字方式／熱転写方式・サーマル方式●文字構成／24×24ドット●印字速度／25字／秒

文書作成画面は30文字×６行（ＭＳＸの場合は15文字×６行)。この他に画面下の２行分は、各種のコマンドや、その状態を表示するために使われている。上書、改頁、終了、次画、前画、行挿、行削、跳ぶ、検索、置換、格納、切取、貼付、メモ、位置、ファイル、配置、印刷、タイプといった具合だ。それぞれのコマンドの前には、それに対応したキーが表示されているので、はじめて「MSX-Write」に触れた人でも、それにならって操作していけばいいようになっている。また編集作業に慣れてきたら、コントロールキーとコマンドキーを使って、直接コマンドを実行することも可能だ。

↑MSX-Write の起動画面。メニュー選択方式だ。
←スター精密のプリンタ「TR-24m」と、アスキーのワープロソフト「MSX-Write」をセットにして販売。

漢字モード25字／秒の高速印字

スター精密の標準ＭＳＸ漢字プリンタ「ＴＲ-24m」は、１秒間になんと25文字の漢字を印字するという、トップクラスの高速印字を誇っている。文字構成は24×24ドット明朝体の高品質印字、音の静かな熱転写／サーマルタイプのプリンタだ。

パーソナルなＭＳＸで、よりパーソナルなワープロとしての使用を考えると、一般家庭でのことが大きくクローズアップされてくる。そんなとき、印字音のうるさいドットインパクトではどうしても役不足。全般に印字速度が速いといっても、印字時間が半分になるというほどのものではない。そこで注目されるのがサーマルプリンタ。感熱紙やサーマルリボンを熱であぶって印字する方式なので、印字音はきわめて静かだ。その上「TR-24m」は、１秒間に25文字の高速印字。ドットインパクト方式に比べ、なんら劣るところはない。これなら昼夜を問わず、１日中いつでもプリンタと仲良くなれるというわけ。

「MSX-Write」とセットにして販売するプリンタだから、ワープロユースに便利な機能も付属している。それが「TR-24m」自慢の、フリーポジション・オートペーパーセット機構。カット紙のセットを簡単にしてくれる。

パナソニックの「FS-PW1」は３月10日発売、価格49,800円。関西電機の「KS-24M」は３月下旬発売、セット価格59,800円。

プリントサンプル

<<<日本語ＭＳＸ－Ｗｒｉｔｅの特長>>>

●簡単入力で高い変換効率（連文節変換）●
カナ漢字変換には、16ビット機で使用されている２文節最長一致法による連文節変換を採用しましたから、35文字（ＭＳＸ２では40文字）までの平仮名文を一気に変換することが可能です。
●16ビット機用の辞書をＲＯＭで搭載●
16ビット機で日本語入力用に広く使われているカナ漢字変換システムの辞書をそのままＲＯＭで搭載しました。約４万語の完成度の高い辞書ＲＯＭと連文節変換により、高い変換効率と高速性を実現しました。
●ＭＳＸ、ＭＳＸ２兼用ソフト●
ＭＳＸ、ＭＳＸ２のいずれでも動作します。もちろん、画面表示は機種に合わせて行われますから、ＭＳＸ２では１行30文字の漢字表示が可能です。このため、前後の文章を確認しながら文章を作成することも容易です。

COLUMN

日本人による日本語のためのワープロに？

初めて日本語ワープロなる機械が出現したころは、1台が何百万円もして、ふーんそんなのができたのか、なんて人ごとのように考えていたものだった。それに、入力方式は、確か和文タイプのようにペンで一文字ずつ拾っていくもので、漢字の音読みを全部覚えなければならなかった。初めて会社に入ったころ、業務部と社長室の間の壁のところにこの方式のが1台置いてあって（もちろんこれ1台きり）、手紙1通書くのに1時間あまりもかかった覚えがあります。

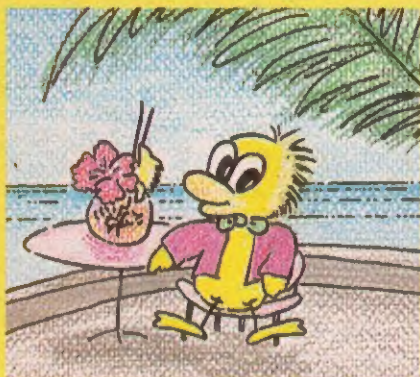
ところが、あれよあれよという間に日本語ワープロが巷間に普及し、しかも熟語変換とか、文節変換とか、いろいろなすぐれた変換方式が当たり前になってしまった。

といってすぐにそうなったわけではなく、100万円前後の事務用ワープロから、パソコンのソフトによるワープロ、そしてポータブルタイプのワープロが順に出現してきたわけです。そして、今はいろいろな種類の専用機（ゲームができるなんてものがあって、これは分類不能）、そしてMSXを始め種々のパソコン専用ワープロなど、選ぶ方が困るくらい。それに価格競争が追い討ちをかけてくれる。

ポータブルワープロの出現はほんの数年前で、たしかブラザーのピコワード。約9万円で漢字が使えるという当時にしては画期的な商品で、私なども飛びついてしまった。第1水準漢字で単漢字変換方式。それから、1年もたたないうちに、熟語で入力できるポータブルワープロが発売されたわけです。

さて、ワープロソフトを選ぶ基準という難しい話があって、簡単に説明できないのは自明の理。

しかし、一番の選択のポイントになるのが、入力の方法ということ。文字の入力方式には、カナ漢字変換入力、ローマ字漢字変換入力などがあるし、熟語の選択も番号で選ぶもの、キーを押すとつぎつぎ変わるものなどがある。さらに、変換方式として単漢字変換（今ごろないか）とか、熟語変換、文節変換などなど……。

ワープロを使って、一番よく使うのが文字の入力で、だからこれがしっかりしていないと、使いずらいものになってしまいます。それ以外の編集機能とか、印字機能も大切ですが、ここのところをさぼって他で取り繕っているものも見られるようです。買う前にいろいろ比較して、必ず使い心地を調べるようにしましょう。

さて閑話復活。ワープロに切っても切れないものがプリンタ。最近は、サーマルプリンタ全盛という感じです。サーマルプリンタ(熱転写)、機械部分が少なくてすむので低価格で低騒音というメリットがあります。逆に、熱転写リボンが一度しか使えず大量の印字に向いていない、光沢のある紙でないと印字品質が落ちる、などのデメリットもあります。

一方ドットインパクトプリンタは、紙質を選ばない、複写が取れる、インクリボンが使えるなどのメリットがあります。デメリットは、価格と騒音。また、一般的にドットインパクトの方が外形が大きくなっています。

大量の印字では、普通の連続用紙が使えるドットインパクトプリンタの独壇場ですが、深夜のデバッグでは深夜スーパーの○○弁当とサーマルプリンタの出番となると思います。本当は、両方あると使い分けができてとても便利です。　(Z)

パソコン通信で最新情報をキャッチ

ソニーとナショナルから、相次いで発売された[illegible]カートリッジ・モデム「HBI-1200」と「FS-CM1」をスロットに差すと、MSXは通信端末に早変わりしてしまうのだ。電話回線を通してさまざまな情報を検索したり、気の合う友だちを探したり。パソコン通信の可能性は、無限に広がっているのだ。

日本全土にネットが誕生

今、MSXやMSX2に限らず、パーソナル・コンピュータのもっともホットな使用法を挙げるなら、パソコン通信にとどめをさす。特集で紹介したMSXネットのようなものから、仲間が集まってはじめたよりパーソナルなBBSまで、さまざまな規模の、そしてさまざまな趣旨を持ったネットワークが、日本全土に次々とでき上がっているのだ。

[illegible]

●使用回線／加入電話回線●通信速度 300ボー（全2重）、1200ボー（全2重）●同期方式 調歩同期●発信 パルスダイアル（10P、20P）、トーンダイアル●ダウンロード、アップロードサポート ●電話帳機能内蔵（S-RAM8キロバイト）●MSX-JE対応 ●漢字40文字×25行表示可

小さなものは、個人が自分のマシンをホスト・コンピュータとして、たったひとりで運営を開始したもの。気心の知れた仲間や、口込みで広まっ

ていった人たちを対象として、ＢＢＳのサービスを行っている。もちろん営利を目的としたものではなく、そのほとんどが無料で会員になれるようなものだ。

提供されるボードの内容も、一般性を帯びたものから、逆に非常にマニアックにその内容を限定したもの、さらには地域性を前面に押し出したタウン誌的なものまで、ネットワークによって違ってくる。中には日頃のうらみつらみを書き込んで、うっぷんを晴らすのが目的のＢＢＳまであるとか。いずれにせよネットに対する熱意というものは、どのネットワークでも同じで、頻繁にアクセスするいわゆる常連たちや、ボードを管理するシグオペ、そしてネットワークそのものを管理するシスオペたちの手によって、どこも活発に運営されている。

さて、そんなネットワークにアクセスするための秘密兵器が、モデム・カートリッジ。今まではスタンド・アローン（つまりひとりぼっちってこと）の存在だったボクたちのＭＳＸを、電話線を通じて他のパソコンとつなげてしまおうというものだ。それぞれ通信のための専用ソフトを内蔵しているので、操作はいたって簡単。ＢＡＳＩＣからコール命令で起動する。一度ネットワークのデータを登録してしまえば、後はカーソルキーやリターンキーを叩くだけで、モデムが自動的に電話をかけ、目指すＢＢＳにアクセスできるという仕組みだ。

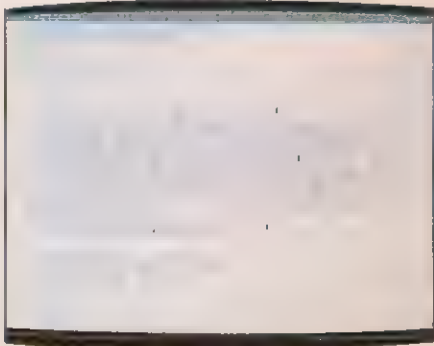
MSX-JE対応で漢字もOK

前のワープロプリンタのところでも触れたけど、ここで紹介する２つのモデムは、ともにＭＳＸ－ＪＥに対応したもの。だから「ＭＳＸ－Write」や「ＦＳ－ＰＷⅠ」、そして「ＦＳ-4600Ｆ」といったワープロをフロントプロセッサとして、ネットワーク上で漢字入力ができるようになる。

「ＨＢＩ－1200」と「ＦＳ－ＣＭ820」の場合、このフロントプロセッサの起動は、ネットワークにアクセスしている状態で、ＧＲＡＰＨキーとＳＥＬＥＣＴキーを同時に押すことで行われる。画面の下１行分が変換エリアとなり、組み合わせて使うワープロソフトの操作に応じて、漢字を入力していけばいいわけだ。ＭＳＸネットではまだまだカタカナが主流だけど、中には漢字がメインとなっているネットも多い。そうしたところにＭＳＸでアクセスする場合は、こうして漢字入力をサポートしているというのは、大きな強みなのだ。

HBⅠは1200ボーをサポート

パソコン通信をしようとする場合、よく問題にされるのがボーレート。これは１秒間にどれだけのデータを送れるかを示した値だ。当然のことながら数値が大きくなるほどデータ量は増え、同じ内容のデータをアクセスするにも、ボ

☗電源を入れると、まずこの電話帳画面が表示される

☗インターレスモードで漢字を表示(40×25)したところ.

FS-CM820

FS-CM820の主なスペック

●使用回線／加入電話回線●通信速度/300ボー（全2重）、1200ボー(半2重）●発信／パルス（10P、20P)、トーン ●漢字ROM内蔵（12×12ドット）●内蔵ソフト48K

ーレートが高いほど時間がかからないですむ。特に遠距離からネットワークにアクセスする場合など、電話料金との兼ね合いで、アクセス時間は可能な限り短くしたいもの。そんなとき、ボーレートの高いモデムがあれば、大助かりというわけだ。

さて「HBI-1200」は、その名が示すとおり1200ボー全2重をサポートしたモデム。今までMSX用として発売されていたのは、すべて300ボー全2重。単純計算をすれば、同じ時間に4倍ものデータを送れるモデムということになる。また、「HBI-1200」は300ボー全2重もサポートしており、ソフトにより切り換えることが可能だ。

⬆まずザ・リンクスか、それ以外のBBSかを選択する。

画面表示は最大で漢字40文字×25行。これはMSX2でインターレスモードを使用した場合で、MSXでは最大20文字×12行の表示が可能になっている。またアクセス中のファイルをディスクにセーブ（ダウンロード）し保存することや、ホストコンピュータにたくわえられているプログラムをダウンロードして共有すること（PDS・パブリック・ドメイン・ソフトなど

と呼ばれる）も可能。これとは逆に、「ＭＳＸ-Write」などで作成した文書ファイルを、ネットワーク上にロード（アップロード）する機能もサポートしている。

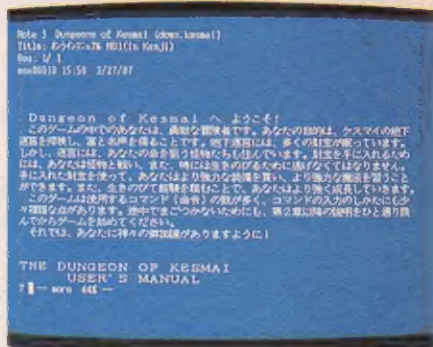
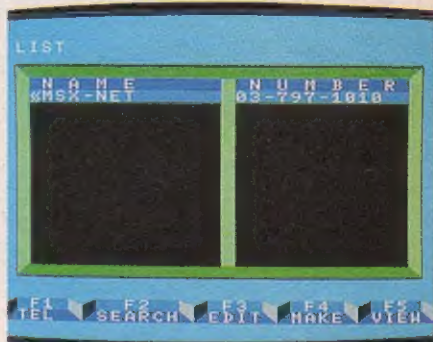
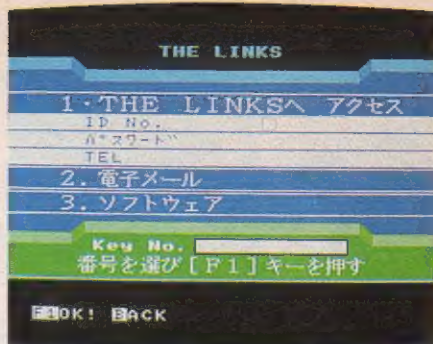
またモデムとしての機能の他に、「HBI-1200」には電話帳としての機能も付属している。これは約100人分の電話番号を登録でき、コンピュータが自動的に電話をかけてくれる（オートダイヤル機能）というもの。手軽に多機能電話が使えるようになるわけだ。

ＦＳはリンクスモデムも兼用

日本初のＭＳＸ専用ネットとして、はやくから運営を開始しているのが「ザ・リンクス」。ただ専用モデムを用意しなければならないことが、他のネットに比べ面倒なところだった。

そこで登場したのが、パナソニックの「ＦＳ-ＣM820」。一般のネットワークには300ボー全2重、そして「ザ・リンクス」には1200ボー半2重と、使い分けが可能な１台２役モデム・カートリッジだ。「ザ・リンクス」にアクセスするための自動ダイヤリングや漢字表示サポートなどのソフトも内蔵しているので、ネットワークは初めてという人でも、安心して使うことができる。もちろん「ザ・リンクス」以外のネットにアクセスするための通信ソフトも内蔵しているので、電話番号や通信パラメータを設定すれば、そのままＭＳＸネットなどに入ることも可能だ。

この「ＦＳ-ＣM820」の優れたところは、12×12ドットの専用漢字ＲＯＭ（ＪＩＳ第１水準漢字＋非漢字）を内蔵していること。インターレスモードで表示した場合でも、非常に読みやすいキレイな漢字が出力される。漢字ＲＯＭを持たないＭＳＸを使っている場合など、モデムひとつでアクセスできるので、もっとも安上がりな方法といえるかもしれない。

また「ＨＢI-1200」と同じように、モデムが約100件の電話番号を記憶し、自動的に電話をかけてくれるオートダイヤル機能も内蔵している。８キロバイトの、バッテリーバックアップ付S-ＲＡＭがあるので、ＭＳＸの電源を切ってもデータはしっかり保存されているよ。

●専用の漢字ＲＯＭで、非常に読みやすい画面表示。

ソニーの「ＨＢI-1200」は３月21日発売、価格32,800円。パナソニックの「ＦＳ-ＣM820」は３月10日発売、価格29,800円。

COLUMN

パソコン通信ハナ盛り

本当に少し前までは、パソコン通信などというのは一握りのコンピュータ技術者のものという感じだったのですが、今ではパソコン利用の中心という感じにさえなりつつあります。この変化は、一体何なのでしょうか。

初期のコンピュータは大変高価で、1台を一人の人間が独占することは許されませんでした。そこで、通信回線を通じて1台のコンピュータを複数の人々が同時に利用する方法がとられました。ところが、マイクロコンピュータLSIのおかげでパソコンとして低価格なコンピュータが作りだされ、一人の人間が1台を独占することができるようになったのです。1台のコンピュータに専用のディスク装置やプリンタなどを接続し、1個所で完結するシステム（スタンドアローンという）です。これは画期的なことで、コンピュータ革命ともいわれました。

ところがスタンドアローンだと、扱える情報は自分が入力した情報か、他の場所で入力されたデータをフロッピーディスクなどを通じて取り込んだものだけに限られてしまいます。情報量が少ないうちはこれでもいいのですが、多くなるに従って不便になってしまいます。

そこで、簡易な処理はパソコンでやって、元になる情報は別の大きなコンピュータに置くという方法が考え出されました。これが、最近騒がれているVANとかLANとかいわれるものです。情報を共有することで、時間的、経済的な効率化が可能になります。

この流れをくむのが現在のパソコン通信ということができ、1台の小さなパソコンを、多くの情報を扱うことのできる総合マシンへと変身させることができます。

パソコン通信のメインはBBS（電子掲示板のこと）です。これは、パソコンネットの会員が仮想のボードにメッセージを書き込み、それを他の会員が自由に読めるというシステムです。仮想のボードというのは、人間がそう意味づけしただけで、本当はコンピュータの中のデータファイルです。そしてもちろん、ある人が書いたメッセージに対する自分の意見を書き込むこともできます。BBSは会員という人間が主体の動的データベースというわけで、自分の知識が広がったり、ネットを通じて知人・友人が増えるなどのメリットがあります。

一方パソコン通信の中には、データベース・サービスがあります。これは、自分が知りたい事項をキーワードなどで指定すると、それに対する内容がデータとして送り返されるシステムです。特許、株式、会社情報、新聞記事など、現在様々なサービスが行われていますが、実際には一般の人というよりプロの人向けというのがほとんどです。

パソコン通信にはその他にも、同時会話機能（CBシミュレータやチャット）、電子メール機能（特定の相手にデータファイルを送る）、通信で商品を注文するオンライン・ショッピングなど、役に立つ機能が用意されています。

ところで、これらパソコン通信は、いずれにしてもシステム管理者、そして会員という人間が作りあげていくものです。いくら良いハードウェアを使っているからといって、役に立つパソコン通信ができるとは限りません。このあたりのことはあまり取り上げられていないようですが、いずれ何らかの形で問題になる時期がくるでしょう。(Z)

エムエスエックスマガジン第5巻第5号通巻42号昭和62年5月1日発行（毎月1回1日発行）昭和59年2月6日第3種郵便物認可